

あつぎ

ATSUGI PUBLIC INFORMATION

平成21年(2009年)
11月1日
No.1074

編集・発行 / 厚木市 政策部広報課
〒243-8511 神奈川県厚木市中町3丁目17番17号
TEL・046-223-1511 FAX・046-223-9951
http://www.city.atsugi.kanagawa.jp/



携帯電話でも広報あつぎが読めます。http://www1.city.atsugi.kanagawa.jp/cp/

[主な内容]

2~5面

特集・介護最前線

6・7面

特集・サラブレッドに夢を乗せ

8面

セーフコミュニティ

9面

住宅用火災警報器

あつぎ自然歳時記

クロコノマチョウ

ジャノメチョウ科

紅葉の季節、夏にクロコノマチョウの幼虫がいた湿地に来た。幼虫がいたジュズダマの葉は枯れかけていたが、つやのある実がたくさん付いていた。山々は美しく染まり、秋を楽しむように鳥たちの声が聞こえる。帰ろうとした時、どこからともなく来た黒っぽいチョウが落ち葉に止まった。そっと近づいたが、フワフワと遠くの黄葉した木に止まった。今度は息を殺して近づくと、羽の緑が突き出たメスのクロコノマチョウだった。褐色のチョウと黄葉した葉による美しい秋の演出。おかげで充実した一日になった。



幼虫の食草は、ジュズダマやススキ、ヨシなどのイネ科植物。成虫は、樹液やカキの実などを吸う。初めて見たのは宮崎県。温暖化の影響で北上しつつある。

写真・文 / 吉田文雄



江頭さん(左から2人目)の手助けで、再び食事を楽しめるようになった健二さん。家族にも笑顔が戻った

特集 介護最前線

生きるって 素晴らしい

食べる喜びをもう一度

栄養士からの贈り物

ある家族の幸せな食卓

彩り豊かな料理が並ぶ食卓で、寿町の福田健二さん(77)が野菜の牛肉巻きを口へ運んでいます。七年前、くも膜下出血で倒れた健二さんはしゃくしゃく飲み込みができなくなり、気管を切開し管で栄養を取っていました。この何げない一面は、倒れた直後には想像もできなかった幸せな瞬間なのです。

健二さんの食を支えるのは、「地域栄養ケアピーチ厚木」の管理栄養士・江頭文江さん(38)です。健二さんが食べる喜びを失いかけた六年前から、月二回の訪問を続けています。

「誰だっていつまでもおいしく食事がしたい。生活から食事がなくなるのはつらいですよね」。人間が人間らしい生活を続けられるよう、一人一人に合った食の在り方を提案する江頭さん。健二さんの妻・ミツ子さん(74)と娘の順子さん(48)に、ミキサーを使った軟らかい料理を紹介しています。「食事を楽しんでみたら」と、食器や料理の彩りにも心を配るよう助言します。福田家では、食感や見た目は異なり



台所で調理の指導を受けるミツ子さん(左)

ますが、みんなが同じ食材を口に入っています。一時期は三十三キロまで落ち込んだ健二さんの体重は、いつの間にか五十キロ台にまで回復しました。「食えることがこんなに素晴らしいことだなんて、父が倒れるまでは想像したことありませんでした」と順子さん。江頭さんが伝える食べる喜びが、食卓に笑顔という花を咲かせます。

【2~5面・特集「介護最前線」に続く】
ケーブルテレビ「あつぎ元気ウエーブ」十一月九日からの放送で、市民リポーターが管理栄養士の活動を紹介します。

特集 介護最前線

生きるって
素晴らしい
素晴らしい

もう悲しみの涙は流さない

温もりが支える在宅介護

その優しさを包まれて

人はどのように生きて、どのように老いていけばいいのでしょうか。老いのありようは千差万別です。誰もが人生の最後の瞬間まで、人間としての尊厳を失うことなく生きていたいと思っす。しかし、その思いを全うすることは容易ではありません。十一月十一日は介護の日です。介護される人と介護する人、いくつかの家族の風景を訪ねながら、老いのありさまと介護の現場を見つめてみました。人は、老いから逃れることはできません。一緒に介護について考えてみませんか。

献身的な在宅介護

「動けなくてもいい、話ができなくてもいい。お父さん、お願いだから生きていて」。くも膜下出血で意識を失い、病院のベッドで眠り続ける福田健二さんの枕元で、娘の順子さんは祈り続けました。平成十四年八月、うだるように暑い夏の日のことでした。健二さんは、妻のミツ子さんと東京の下町で暮らしていました。お盆で実家に帰省していた娘たち家族と楽しく過ごしてから十日ほどたったころ、突然、病魔に襲われたのです。順子さんは当時、愛知県豊田市で暮

らしていました。ベッドで眠る父親の世話をする母を手助けしようと、夫の協力を得て東京で介護を始めました。

十五年一月、健二さんは秦野市のリハビリテーション病院へ転院。同年六月にミツ子さんと順子さんも厚木市に引っ越してきました。見知らぬ土地での慣れない生活。介護の疲れや境遇への悲しみ、将来への不安に、涙を流すこともあったといいます。同年七月、最初の入院から一年を迎



「偉いのは家族」と話す酒井さん（中央）。在宅介護を支える



石井さん（左）の存在が順子さん（右）たちの力に

えようとするころ、ようやく退院の日を迎えました。しかし、それは家族にとって、在宅介護という新たな重荷が加わることを意味していました。「心が壊れてしまいたいというようになったこともあった」という二人に、医療や介護に携わる人たちの手が差し伸べられました。医師・酒井英光さん（56）もその一人です。健二さんの具合が悪くなれば自宅へ駆け付け、小まめな電話や訪問診療で家族を支え続けました。当時、流動食が多かった健二さん。「きちんとした食事をさせたい」と願う家族のために、管理栄養士（一面参照）を紹介したのも酒井さんです。

たくさんの方の支援があるから

二人の介護への不安を取り除いてくれたのは、「訪問看護ステーションさつき」の看護師・石井由紀子さん（53）です。六年前に福田家を初めて訪れて以来、体のふき方やたんの吸引、排泄処理の仕方などを親身になって教え、時には相談相手となってきました。「最初のころは、二人ともすごく悩んでいました。家族の頑張りで、健二さんは口から食事ができるようにになり、文字や絵を描くこともできるようになりました。その時は、わたしも本当にうれしかった。これからも、喜びや苦しみを共感できる関係でいたいのですね」。苦楽を共にしてきた両者は、深いきずなで結ばれています。石井さんが訪れる木曜日は、家族にとって安



健二さんにとってデイサービスは、息抜きとリハビリの貴重な時間

生きる幸せを感じて

厚木市で始まった福田家の在宅介護。「生きてさえいてくれればいい」と思っていた家族の心に、少しずつ変化が生まれました。「父には、最後まで人間らしく生きてほしいと思っています。最近、何げない出来事を幸せだと感じられるようになりました。たくさんの方の優しさと励ましが教えてくれた生きる喜びとささやかな楽しみが、わたしたちに勇気を与えてくれました」。そう言いつつ、順子さんはほほ笑みながらそっと目頭を押さえました。かつて、介護に疲れ不安と悲しみの中で流した涙は今、福田家を包む優しさへの感謝の涙に変わりました。

れ、どんなに心強かったことか」と順子さんは振り返りますが、酒井さんは家族の努力を評価します。「在宅介護は、家族がしっかりといるからこそ成り立ちます。健二さんが家で暮らせるのは、家族の献身的な努力があるから。わたしはたまに来て、愚痴を聞きながら当たり前のことをするだけ」